SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Teaching “English songs” in Foreign Language Activities/Foreign Language Education and Music Education : Focusing on cross-curricular instruction and “phonological structure”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 美由紀, 河合, 紳和, 澤田, 育子, 柳, 善和 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028149

【 論文 】

外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導
－教科間の連携と「音韻構造」に焦点をあてて－

高橋　美由紀[1]・河合　紳和[2]・澤田　育子[2]・柳　善和[3]
[1]愛知教育大学学術院教育学領域
[2]愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育研究科共同教科開発学専攻
[3]名古屋学院大学

要約
「英語の歌」は，以前より外国語活動・外国語科と音楽科の両方の教科で教材として使われているが，2020 年度から順次実施される新学習指導要領においては，「英語の歌」について両教科で統一された内容では示されていない。
本稿は，外国語活動・外国語科と音楽科の教科横断的な視野に立っての効果的な「英語の歌」の指導について考察する。はじめに，学習指導要領及び教科の専門的分野での知見から，外国語活動・外国語科と音楽科各々の教科での「英語の歌」の位置付けや育成を目指す資質・能力について分析した。次に，実践的指導を行うための教材として，外国語活動・外国語科教育と音楽科教育のそれぞれの視点から教科横断的な指導へと繋げるために，具体的に小学校外国語科の教科書で扱われている英語の歌 *Twinkle, Twinkle, Little Star* を取り上げて「音韻的構造」から教材内容や指導について考察した。

キーワード
英語教育，音楽教育，英語の歌，音韻構造

1　本研究の背景と目的

外国語教育，とりわけ早期外国語教育において「英語の歌」を取り入れた学習は多い。しかしながら，小学校外国語活動では，オーセンティックな教材であるナーサリーライム等，英語圏で広く親しまれ歌われている「英語の歌」ではなく，英語の音声に慣れ親しむ学習を目的としているものが多い。例えば，2008 年に文部科学省が作成した初めての小学校英語活動の教材『英語ノート 1 』（文部科学省 2008a）では，早期英語教育で定番の *Head, Shoulders, Knees and Toes* 等の歌だけでなく，文部科学省が独自で作成した *Seven Steps* のメロディーで歌う *Ten Steps*，*Twenty Steps* が，『英語ノート 2』（文部科学省 2008b）では，*London Bridge Is Falling Down* のメロディーで歌う *Thirty, Forty, One Hundred* 等の「替え歌」が，それぞれ掲載されており，次いで作成された『Hi, friends! 1/2』（文部科学省，2012a，2012b）では，チャンツは全てのレッスンで導入されていたが，「英語の歌」は，*Hello Song* と *Sunday，Monday，Tuesday* の 2 曲のみが取り扱われていた。

2020 年度から使用されている外国語科の文部科学省検定済教科用図書（以下，単に「教科書」と記す）においても「英語の歌」は，〈Let’s Sing〉（東京書籍）や〈英語の歌〉（光村図書），〈Song for lesson〉（学校図書），〈Let’s Enjoy the Music〉（教育出版）等，教科書会社によってそれぞれの特色があり，各レッスンにおいて，言語活動で活用できる語彙やフレーズの練習・定着のための教材としてのものや，英語圏で広く親しまれ歌われているオーセンティックな教材としてのものが取り扱われている。ここでの「英語の歌」の教材は，外国語活動・外国語科の目標である「外国語や外国の文化を学んだり，外国語を用いてコミュニケーションを行ったりすることに興味や関心を持たせる」ことに焦点が当てられている。そのため，音楽科における「歌唱」の指導で行なわれるような音楽的な学習についての指導はなされていない。

一方，音楽教育においても「英語の歌」は教材として取り入れられ，小学校音楽科の教科書にも掲載されている。『小学校学習指導要領』（文部科学省 2018b）音楽科における「内容」の「A 表現」（1）歌唱には，歌詞に関する事項の記載が見られ，曲想と歌詞の内容との関わりについて理解することが重視されている。しかし，ここでの「英語の歌」の扱いは，外国語活動・外国語科にとって重要な英語の音声やリズムと日本語の違いに気付いたり理解したりさせる，実践的なコミュニケーション活動を意識した教育とは考えにくいと思われる。

以上のことから，本稿では，外国語活動・外国語科と音楽科の教科横断的な視野に立っての効果的な「英語の歌」の指導について考察する。はじめに，実際の指導方法に導くために，指導法の基になる学習指導要領，とりわけ「英語」の記述が明記されている学習指導要領を対象として論じる。具体的には，外国語活動・外国語科と音楽科の「英語の歌」についてのこれまでの指導の在り方と課題について論じ，次に，今後の教育として，外国

語活動・外国語科と音楽科のそれぞれの教育の利点を活かした「英語の歌」の活用意義について，*Twinkle, Twinkle, Little Star* を使用したパイロットスタディから考察する。なお，具体的な指導方法の実際についての議論は，本稿の目的とはしていない。

２ 外国語活動・外国語科における「英語の歌」の学習の位置付け

「英語の歌」は母語教育・外国語教育の教材として多くの国で取り入れられており，音楽と言語教育の結び付きは，活版印刷が発明される前から密接であった。アメリカでは現在でも第二言語教育において，ナーサリーライムを使用した教育が行われている（和田 2017, Eken 1996）。

Curtain & Dahlberg（2016）は，外国語の授業における歌の効果として，以下のように文化的な側面と言語面での利点を挙げている。

> Songs learned in the target language have the double benefit of giving students experience with an important dimension of the target culture and helping them to internalize the sounds, vocabulary, rhythms, and structures of the new languages.
>
> （Curtain & Dahlberg 2016 : 370）

高橋（2006）は，文部科学省（2001），Philips（2001），Rivers（1981）等の知見から，日本の公立小学校での英語の学習において歌やチャンツを使用する効果として，①児童の発話が容易にできる，②児童に言葉の定着を促す，③児童は抵抗感なく楽しい雰囲気で授業に参加できる，④教師は授業にメリハリを持たせることができることを結論付けている（高橋 2006:46）。また，山内（2017）は，「英語の歌」の効果として，「小学校段階においても導入が可能なオーセンティックなリスニング教材としてもとらえることができ，授業内で自然な発音の英語を耳にする機会を増やすことにもつながる。」と述べている（山内 2017: 67）。

文部科学省は，『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』において，歌・チャンツの効果として，「歌やチャンツは，児童が音程やリズムに合わせて活動することができ，楽しみながら自然に英語の音声や表現に慣れ親しむことができるため，小学校の授業では多く取り入れられている。」と述べている。そして，(1) 児童の興味・関心を高めることができる，(2) 外国語の音声やリズムに慣れ親しむことができる等の利点をあげている（文部科学省 2017 : 105）。

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語活動・外国語編』では，言語活動で扱う題材として，児童の興味・関心に合ったものを扱うことが大切であるとし，児童が国語科や音楽科，図画工作などの他教科等で得た知識や体験などを生かして活動を展開することが示されている（文部科学省 2018a: 45-46, 125-126）。

そして，外国語活動の学習において「英語の歌」は以下のように言及されている。

> **２　内容**
> **〔第３学年及び第４学年〕**
> 〔知識及び技能〕
> (1) 英語の特徴等に関する事項
> 実際に英語を用いた言語活動を通して，次の事項を体験的に身に付けることができるよう指導する。
> イ　日本と外国の言語や文化について理解すること。
> (ｱ) 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
>
> 外国語活動においては，多くの表現を覚えたり，細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解したりすることを目標としていない。一方，音声面に関しては，児童の柔軟な適応力を十分生かすことが可能である。そこで，外国語活動では，英語の音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切になる。例えば，日本語のミルク（mi-ru-ku）は３音節であるが，英語の milk は１音節である。これを日本語のようなリズムで発音すると，英語に聞こえず，意味も伝わらない。そこで，実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して，英語特有のリズムやイントネーションを体得することにより，児童が日本語と英語との音声面等の違いに気付くことになる。

（文部科学省　2018a : 24, 26）

> **(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項**
> ①　言語活動に関する事項
> ア　聞くこと
> (ｳ) 文字の読み方が発音されるのを聞いて，活字体で書かれた文字と結び付ける活動。
>
> この事項は，発音される文字の読み方と書かれた文字とを結び付ける活動を示している。ここでの「文字」とは，英語の活字体の大文字と小文字を指し，「読み方」とは，文字の「名称」を指している。（中略）
> 外国語に初めて触れる中学年段階であることを考慮し，一時に全ての読み方と文字について一致させることを求めたり、知識として指導したりするのではなく，あくまでも活動を通して，体験的に文字に親しませることが重要である。（中略）
> 本活動の前段階として，歌やチャンツの中で文字の読み方に親しませたり，文字の形を指で作ってみたり，形に着目して仲間分けをしたりするなど，児童が文字に親しみ，興味・関心が高まるよう，多様な活動を経験させておくことが大切である。

（文部科学省　2018a : 31）

一方，高学年の外国語科では，中学年の外国語活動の「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通して音声で十分に慣れ親しんだことを踏まえて，発達段階に応じて，段階的に「読むこと」「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うということから，以下のように示されている。

２　内容
〔第５学年及び第６学年〕
〔知識及び技能〕
(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項
①　言語活動に関する事項
イ　読むこと
(ｱ)活字体で書かれた文字を見て，どの文字であるかやその文字が大文字であるか小文字であるかを識別する活動。

この事項における「識別する」とは，活字体で書かれた文字の中から，例えば A, B や a, b という文字を見て，それらが，/ei/, /bi:/ を表した文字であると認識することである。（中略）
この事項は「読むこと」の活動のうち最も基本的なものであり，丁寧で確実な指導が必要である。例えば，歌やチャンツなどでまずは音声に十分に慣れ親しませたり，（中略）複数の授業において繰り返し取り扱うことが大切である。

（文部科学省　2018a：103）

以上のことから，現在の外国語活動・外国語科での「英語の歌」の教材は，英語の音声とリズムの慣れ親しみ，言語と文化の理解，音声から文字を識別することに主眼をおいた教育での活用として位置付けられている。

３　小学校外国語科の教科書にみられる「英語の歌」

小学校外国語科の教科書は，以下の７社である。

『Blue Sky 5/6』(啓林館)
『CROWN Jr. 5/6』(三省堂)
『Here We Go! 5/6』(光村図書)
『Junior Sunshine 5/6』(開隆堂)
『JUNIOR TOTAL ENGLISH 1/2』(学校図書)
『NEW HORIZON Elementary English Course 5/6』(東京書籍)
『ONE WORLD Smiles 5/6』(教育出版)

これらの教科書において，「英語の歌」については，①ナーサリーライムや英語圏でつくられた歌（表１），②教科書の内容を定着させるために教科書会社が独自で作成した歌等，③チャンツのみで「英語の歌」についての掲載はない等，各々の教科書会社によって取扱いが異なっている。

『NEW HORIZON Elementary English Course 5/6』では，〈Let's Sing〉として，*Nice to Meet You, Happy Birthday!*，*What Do You Have on Mondays?* 等，この教科書のために作成された歌が掲載されており，各単元のテーマと関連している。指導書には，「多くは明るい曲で，前向きな特徴を持つ歌を毎時間授業の冒頭で聞くことで，児童は聞き取れる部分から少しずつ口ずさんでいくようになるだろう。音楽は話し言葉として英語の持つリズム，ストレス，イントネーションなどを伝えることができる。」と記載されており（東京書籍 2020: 28），これらの歌は，英語の音声やリズムなどに慣れ親しみ，発話に繋げる言語活動としての役割を担っている。また，第６学年の最後に学習する〈Make an Original Song!〉では，第５学年 Unit 4 で学習したメロディーにのせて，歌詞を替えてオリジナルソングをつくる活動も掲載されている（東京書籍 2020: 84）。一方，ナーサリーライムや英語圏で作成された歌については，第６学年の教科書には、〈おすすめの英語の歌〉として，*Take Me Home, Country Roads* と *We Are the World* が紹介されているが，第５学年の教科書には取り扱われていない。

『Here We Go! 5/6』では，発展学習の〈英語の歌〉として，*This Is the Way*, *Pease Porridge Hot*, *I love the Mountains*, *Take Me Out to the Ball Game*, *Over the Rainbow* 等が取り扱われている。指導書によれば，これらの歌は，「英語圏で親しまれている歌を中心に，ストーリー性，メッセージ性，遊戯性があり，歌を通して，児童が母語とは異なる音やリズム，歌詞や遊びから感じられる異文化等，外国語や異文化に共感する体験ができること，さらに，歌に込められた言語や文化を超えて共通することに気付かせることができること」や「歌が英語学習に果たす役割」として，①楽しさ―歌を聴いたり歌ったりすることは楽しい学習につながりやすい。「楽しい」という感情を，「歌えるようになりたい」，「意味が分かるようになりたい」という学習意欲につなげる，②まとまりのある英語に触れる―歌の歌詞にある程度の長さがあるため，児童がまとまりのある英語に触れる機会となる，③言語習得上の役割―英語特有の音・リズム・イントネーションに触れるだけでなく、文法構造に無意識のレベルで触れることができる，④言語文化理解における役割―児童が歌い遊ぶことが言語文化に触れる活動となり，外国語への関心や異文化を尊重する心の芽を育むことにつながる等，について言及されている（光村図書　2020：206）。

以下は，各教科書に掲載されているナーサリーライムや英語圏でつくられた「英語の歌」である（表１）。

表１：ナーサリーライムや英語圏で作成された歌

教科書名	取り扱われている歌
『NEW HORIZON Elementary English Course　5』	取り扱われていない。
『NEW HORIZON Elementary English Course　6』	・*Take Me Home, Country Roads* ・*We Are the World*
『Here We Go! 5』	・*This Is the Way* ・*Pease Porridge Hot* ・*I Love the Mountains* ・*On Top of Spaghetti* ・*It's a Small World* ・*Everyone Is Special*

『Here We Go! 6』	・*How Do You Do?* ・*Do-Re-Mi* ・*Take Me Out to the Ball Game* ・*A Sailor Went to Sea* ・*Humpty Dumpty* ・*Me on the Map* ・*Bring Happiness to the World* ・*Over the Rainbow* ・*I Think You're Wonderful*
『Junior Sunshine 5』	・*ABC Song* ・*Twelve Month* ・*Sunday, Monday, Tuesday* ・*Twenty Steps* ・*Hundred Song*
『Junior Sunshine 6』	・*Twinkle, Twinkle, Little Star*
『JUNIOR TOTAL ENGLISH 1』	・*The Bear Went over the Mountain* ・*Rain, Rain, Go Away* ・*Pat-A-CAKE* ・*A Sailor Went to Sea* ・*Pease Porridge Hot* ・*Eentsy, Weentsy, Spider* ・*One, Two, Three, Four, Five* ・*One Elephant Went Out to Play* ・*This Little Pig Went to Market* ・*Old MacDonald Had a Farm*
『JUNIOR TOTAL ENGLISH 2』	・*I Love the Mountains* ・*If You're Happy* ・*London Bridge* ・*Row, Row, Row Your Boat* ・*Mary Had a Little Lamb* ・*Down by the Bay* ・*The Farmer in the Dell* ・*Once an Austrian Went Yodeling* ・*This Old Man* ・*She'll be Comin' Round the Mountain*
『ONE WORLD Smiles 5』	・*It's a Small World*
『ONE WORLD Smiles 6』	・*Smile*

4　音楽科における「英語の歌」の学習の位置付け

2020 年度から，小学校では新しい学習指導要領（文部科学省 2018b）が完全実施され，各教科等の教科書も新課程版へと切り替わった。小学校音楽科では 2 つの教科書会社（ここでは仮に「A 社」「B 社」とする）による 2 種類の教科書が採択されているが，両社とも，これまで高学年（第 5 学年及び第 6 学年）の教科書にのみ掲載していた「英語の歌」を，中学年（第 3 学年及び第 4 学年）の教科書にも新たに掲載した。これは，小学校における外国語活動の学年繰り下げと外国語科の新設を受けての変更であると考えられる。

高学年において外国語活動が必修化された 2011 年度以前に使用されていた音楽科の教科書では，第 6 学年のみで「英語の歌」を掲載していたが，曲の前半だけを英語で歌い，後半は日本語で歌う形にしていたり，英語のスペルは表記せずカタカナで歌詞を表記したりしていた。2017 年度版以降では，歌詞は両社とも英語のスペル表記にカタカナのルビを付した形で示し，楽譜の下には「カタカナは歌うときの目安である」旨の注を記している。

2020 年度から使用されている教科書に掲載されている「英語の歌」は表 2 に示す通りであるが，2 社の間でその難易度に大きな隔たりがあること，たとえルビが付されているとはいえ，小学生には歌詞の発音が（したがって歌唱も）難しいと思われる曲が含まれていることを確認することができる（表２）。

表２：2020 年度版の小学校音楽の教科書に掲載されている「英語の歌」

A 社	B 社
【第 3 学年】 *It's a Small World* 歌詞 It's a world of laughter, a world of tears; it's a world of hopes, and a world of fears. There's so much that we share That it's time we're aware. It's a small world after all. It's a small world after all. It's a small world after all. It's a small world after all. It's a small, small world.	【第 3 学年】 *Head, Shoulders, Knees And Toes* 歌詞 Head, shoulders, knees and toes, Knees and toes, Head, shoulders, knees and toes, Knees and toes, And eyes and ears and mouth and nose, Head, shoulders, knees and toes, knees and toes.
【第 4 学年】 *I Love the Mountains* 歌詞 I love the mountains, I love the rolling hills, I love the flowers, I love the daffodils, I love the fireside, when all the lights are low, Boomdeahda, Boomdeahda, Boomdeahda, Boomdeay.	【第 4 学年】 *Sing a Rainbow* 歌詞 Red and yellow and pink and green, Purple and orange and blue. I can sing a rainbow, sing a rainbow, sing a rainbow, too. Listen with your eyes, Listen with your eyes and sing everything you see. You can sing a rainbow, Sing a rainbow, Sing along with me.
【第 5 学年】 *Auld Lang Syne* 歌詞 Should auld acquaintance be forgot, And never brought to mind? Should auld acquaintance be forgot, And days of auld lang syne? For auld lang syne my dear, For auld lang syne, We'll tak'a cup o'kindness yet, For auld lang syne.	【第 5 学年】 「こげよ マイケル」 （*Michael, row the boat ashore*） 歌詞 Micheal, row the boat ashore, Hallelujah!

【第 6 学年】	【第 6 学年】
Take Me Home, Country Roads 歌詞 Almost heaven, West Virginia, Blue Ridge Mountains, Shenandoah River. Life is old there, older than the trees, younger than the mountains, growin' like a breeze. Country Roads, take me home to the place I belong. West Virginia, mountain momma, Take me home, Country Roads. *Olympic Hymn* 歌詞 Olympian flame immortal, whose beacon lights our way, emblaze our hearts with the fires of hope on this momentous day. As now we come across the world to share these Games of old, let all the flags of every land in brotherhood unfold.	*Edelweiss* 歌詞 Edelweiss, Edelweiss, Ev'ry morning you greet me. Small and white, Clean and bright, You look happy to meet me. Blossom of snow, May you bloom and grow, Bloom and grow forever. Edelweiss, Edelweiss, Bless my homeland forever.

新学習指導要領（文部科学省 2018b）では，音楽科の学習において,「英語の歌」の学習で身に付けさせる資質・能力として「英語らしい発音で歌う」ことは設定していない。第 5 学年及び第 6 学年の音楽科の「内容」における「A 表現」(1)　歌唱には，歌詞に関する事項の記載が見られるものの，事項イ（知識に関する事項）では，曲想と「歌詞の内容」との関わりについて示されているに留まり,「歌詞の発音」には言及していない。また，事項ウ（技能に関する事項）には，その(イ)に「発音の仕方に気を付けて」という文言は見られるが，これについて『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』（文部科学省 2018c）（以下「中学校解説」）では「母音，子音，濁音，鼻濁音などの日本語のよさを生かした発音や語感に気を付け（下線筆者）」と説明しており，外国語（英語）歌詞の発音や語感については想定していない（表３）。

ここで一点注意しなければならないことは，以下に示す事項ウの(ア)から(ウ)の各事項（中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽における事項イの(ア)から(ウ)も同様）は，いずれか一つ以上を選択して扱うことができることになっている。したがって，事項ウの(ア)や(ウ)を選択して授業を構想した場合には,「発音の仕方」については扱わなくてもよいことになる。

表３：「A 表現」(1) 歌唱の活動を通して身に付ける資質・能力（『小学校学習指導要領』 音楽科「内容」より）

事項	イ（知識に関する事項）	ウ（技能に関する事項）
第 5 学年 及び 第 6 学年	曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解すること。	思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。 (ア) 範唱を聴いたり，ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能 (イ) 呼吸及び発音の仕方に気を付けて，自然で無理のない，響きのある歌い方で歌う技能 (ウ) 各声部の歌声や全体の響き，伴奏を聴いて，声を合わせて歌う技能

歌やチャンツ等の音楽的要素を用いて英語の発音や語感，イントネーションやリズム等を身に付けさせる学習は，小学校の外国語活動・外国語科の学習の中でもしばしば導入されていることであるため,音楽科における「英語の歌」の学習の位置付けが明確にされていない中で，これらを教材として用いることの意味はあまりないように思われる。逆の言い方をすれば，音楽科において「英語の歌」を，外国語活動及び外国語の学習との関係を明確にしながら教科の特性に応じた位置付けをすることによって，それぞれの教科で育成を目指す資質・能力を相互に補完し合えるのではないかとも考えられる。

中学校音楽科で採択されている教科書では，A社，B社ともに歌詞にルビは付しておらず，いわゆる「カタカナ英語」ではなく英語らしい発音で歌うことへの暗黙の期待を見て取ることができる。また,『中学校学習指導要領』には，すべての学年において,「内容」の事項イ（知識に関する事項）に「歌詞の内容」に加えて「言葉の特性」への言及が見られるとともに，事項ウ（技能に関する事項）にも「言葉の発音」への言及が見られる（表４）。事項イで示されている「言葉の特性」について，中学校解説では「言葉の抑揚，アクセント，リズム，子音や母音の違い，言語のもつ音質，語感などが挙げられる」とし，「言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり」について，第 2 学年及び第 3 学年での学習の展開例として「諸外国の音楽を取り上げ，表現の相違点や共通点などを調べたり考えたりすることにより，世界には多様な音楽があり，それぞれに声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりがあることを理解できるような展開」が考えられるとしている（文部科学省　2018c:70-71）。また，事項ウで示されている「発音」については「子音や母音などがある」とし，第 1 学年での学習の展開例として「日本語のもつ美しさを味わえる歌唱教材を扱う授業

では，生徒が，歌詞の詩情を味わいながら子音や母音の発音を工夫するなどして技能を身に付けていく学習」が考えられるとしており，外国語の歌詞による歌唱教材の例は示していない。

表４：「Ａ表現」(1) 歌唱の活動を通して身に付ける資質・能力
（『中学校学習指導要領』 音楽科「内容」より）

事項	イ（知識に関する事項）	ウ（技能に関する事項）
第1学年	次の(ｱ)及び(ｲ)について理解すること。 (ｱ) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わり (ｲ) 声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり	次の(ｱ)及び(ｲ)の技能を身に付けること。 (ｱ) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能 (ｲ) 創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能
第2学年及び第3学年	次の(ｱ)及び(ｲ)について理解すること。 (ｱ) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わり (ｲ) 声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり	次の(ｱ)及び(ｲ)の技能を身に付けること。 (ｱ) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能 (ｲ) 創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能

高等学校芸術科音楽においても，中学校音楽科と同様に「内容」の事項イ（知識に関する事項）では「言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり」を示している。また，中学校音楽科で「歌詞の意味」としていた部分が，高等学校芸術科音楽では「歌詞」としている（表５）。これについて，『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　芸術編』（文部科学省　2019a）では「情景や心情といった歌詞の内容に加え，助詞や接続詞などを含む，言葉と曲想との関わりに関する学習も含め，歌詞についてより深く捉えることを求めているからである」と説明している（文部科学省　2019:30）。事項ウ（技能に関する事項）では「曲にふさわしい発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能」としており，「英語の歌」を，それにふさわしい発音で歌うことが求められていると読み取ることができる。また，中学校解説で示していたように，言葉の発音については「子音や母音などがある」とした上で，「子音や母音を適切に発音できることは，一つ一つの言葉の役割や意味を曲想と関わらせて歌唱表現をするための重要な技能の一つである」と指摘している（文部科学省　2019:32）。

表５：「Ａ表現」(1) 歌唱の活動を通して身に付ける資質・能力
（『高等学校学習指導要領』 芸術科音楽I「内容」より）

事項	イ（知識に関する事項）	ウ（技能に関する事項）
音楽I	次の(ｱ)から(ｳ)までについて理解すること。 (ｱ) 曲想と音楽の構造や歌詞，文化的歴史的背景との関わり (ｲ) 言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり (ｳ) 様々な表現形態による歌唱表現の特徴	創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な，次の(ｱ)から(ｳ)までの技能を身に付けること (ｱ) 曲にふさわしい発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能 (ｲ) 他者との調和を意識して歌う技能 (ｳ) 表現形態の特徴を生かして歌う技能

５　高等学校芸術科音楽における「英語の歌」の指導

高等学校芸術科音楽で用いられている教科書は，3 つの教科書会社が各 2 種類を発行しており，計 6 種類の教科書から採択されている。そのいずれにも「英語の歌」が掲載されており，その曲種はポピュラー・ソング，映画の主題歌，ミュージカル・ナンバー，民謡やマドリガルなど多様である。歌詞に含まれる単語も，高校生が既習のものばかりではなく，必ずしも英語の学習実態を反映させた教材ばかりとは言えない。また，「英語の歌」以外にも，イタリア語，ドイツ語，フランス語，中国語，朝鮮語など，様々な言語の歌詞による歌唱教材が掲載されており，「2 単位」という標準単位数による時間的制約を考えると，「英語の歌」の学習に多くの時間を配当し，丁寧に指導することが困難である。

筆者は，高等学校芸術科音楽の授業における英語の歌の指導で，歌詞の発音指導，すなわち，「英語の歌」を「英語らしい発音」で歌うための指導がどの程度行われているかを把握するため，アンケート調査を実施した。高等学校に常勤で勤務する 25 人の音楽教師に協力を依頼し，23 人から回答を得た。このうち，2 人は「英語の歌を授業で使用しているか」という問いに「使用していない」と回答したため，以下のデータは 21 人の音楽教師の回答に基づくものである。

「英語の歌」の指導に配当する時間数は，最も多い教師で 6 時間，最も少ない教師で 1 時間であり，平均は 3.45 時間であった。中には複数の歌を取り上げている教師もおり，配当時間と併せて考えると，歌詞の発音に十分な時間を費やすことが現実的に困難であることが分かる。

歌詞の発音指導について，「歌詞の音読を行っているか」，「楽譜中に歌詞の読みを書かせているか」，「発音指導を行っているか」の問いに対しては，以下のような結果であった。

数値は回答数，（　）はパーセント。以下同じ

Q「歌詞の音読を行っているか」
- 行っている 14（66.7）
- 行っていない 7（33.3）

Q「楽譜中に歌詞の読みを書かせているか」
- 全員に書かせている 2（9.5）
- 書くことを認めている（禁止していない）7（33.3）
- 書かせないようにしている 2（9.5）
- とくに何も指示していない 10（47.6）

Q「発音指導を行っているか」（複数回答可）
- 教師自身が範読して行っている 13（61.9）
- 他の教員の協力を得て行っている 1（4.8）
- 音源等を用いて行っている 8（38.1）
- 行っていない 3（14.3）

前述のように，高等学校芸術科音楽の教科書に掲載されている「英語の歌」は，歌詞も難しく，またポピュラー・ソングやミュージカル・ナンバーのような作品の場合，リズムも複雑なものが多いことから，単語そのものの発音に加えて，それをリズムに当てはめることができるようにしなければならないことから，音読を取り入れたり，生徒に歌詞の読みをカタカナで書かせることを許容したりする教師が多い。

一方で，「英語らしい発音」で歌うことに対する教師の意識については以下のような結果が得られた。

Q「英語の歌」を学習する際，「英語らしい発音」で歌うことについてどのように考えるか」
- 音楽の授業でも「英語らしい発音」で歌うことは重要である 9（42.9）
- 「英語らしい発音」で歌うことが望ましいが，それに時間を費やす必要はない 12（57.1）
- 英語の授業ではないので，「英語らしい発音」は重要ではない 0（0）

全回答が，音楽の授業においても「英語の歌」を「英語らしい発音」で歌うことの重要性を認めている反面，多くの教師が，限られた時間をそのことに費やす必要はないと考えている。こうした教師の葛藤は，次のデータからも読み取れる。

「英語の歌の指導に難しさを感じているか」という問いには，大多数の 18 人（85.7%）が「感じている」と回答したが，その理由として以下のような自由記述回答が得られた。

原文のまま。ただし，区分は事後に筆者が行ったものである

Q「どのような点に難しさを感じているか」（自由記述）

○歌唱指導に関すること
- 教科書の英語の歌はリズムや音程など難しい教材が多い（正しく歌うだけでも大変なのに発音の大変さも加わってさらに大変）
- 子音を入れるタイミングを理解できていない。

○発音指導に関すること
- 自分自身の発音の能力不足
- 自分が本当に正しい発音で指導できているか不安
- 発音指導
- 自分自身の発音に自信がありません
- カタカナでは正しい発音を書き表せない

○英語の発音に関すること
- 多人数で歌うとき言葉が揃わない
- 発音の難しさや抵抗感から声が小さくなってしまう
- 子音の発音（とくに l，r，p，t，w など）
- th や f など，日本語にない発音を生徒が発音できない
- 英語の授業で正しい発音を学んできていない

○生徒の意識に関すること
- 「英語」そのものに対して苦手意識をもつ生徒へのアプローチ
- 英語の授業に楽しさを感じていなければ，生徒が歌唱が好きであっても抵抗感をもたれてしまうこと
- 生徒が「英語らしい発音」で歌うことに対してモチベーションが低い

○授業時間に関すること
- 十分な時間を充てられない
- 生徒の興味関心を引き出すための十分な時間がない

上のように回答を整理してみると，5 つの回答区分のうちはじめの 3 つ（「歌唱指導に関すること」，「発音指導に関すること」，「英語の発音に関すること」）の各回答が「英語の歌」を「英語らしい発音」で歌おうとする際に起こる課題であると捉えることができる。「英語の歌」の指導において，発音の問題が教師の大きな「悩みのたね」となっていることがわかる。高等学校の音楽教師は，大学で音楽の専門教育を受けており，声楽の専門的な技能指導は主にイタリア歌曲とドイツ歌曲によって受けてきている。これらの言語と比較して，英語は綴り字と発音との乖離が激しい言語であり，とくに母音の発音の種類は際立って多い。また，歌唱の際の音符とシラブルとの対応関係が，イタリア語やドイツ語の歌曲のように明解ではないため，「難しい」と感じる教師が多いのではないかと考えられる。また，回答の中には「カタカナでは正しい発音を書き表せない」のように，英語歌詞の発音の難しさから生徒を解放するためには「カタカナで読み方を書く」ことを妨げられないが，その代わり「英語らしい発音」で歌唱することを犠牲にしなければならないといった指導における教師の葛藤が覗えるものもある。

これに対して「（難しさを）感じていない」と回答した理由として「時間はかかるが続けていれば生徒は慣れる」，「日本語の歌より感情表現をしやすいため，生徒が意欲的に取り組む」などが挙げられた。とくに後者は，歌詞が外国語であるために，意味が強調されにくいという外国語教材ゆえの利点のひとつでもあり，音楽科の指導（とりわけ歌唱指導）において重要な要素と言えよう。

「英語の歌の学習で，どのような資質・能力を生徒に身に付けさせたいと考えているか」という問いに対しては，以下のような自由記述回答が得られた。

回答は原文のまま

＊英語の歌を歌うことで，イントネーションや流れなどを掴み，それが英語の授業や学習に貢献できれば，と思い取り上げている。
＊日本語とは違った語感や音楽のつくりを感じながら演奏する力
＊英語の歌唱の特徴をおさえた発声，楽曲の特徴，表現の工夫
＊英語に関わらず，作品としてのよさ（発音も含めて作曲者がイメージした音）を感じ取り，表現しようとする姿勢を身に付けさせたい
＊音声として，より人に伝わる表現力を身に付けさせたい
＊英語の歌詞から受けることができる響きを味わうことができる
＊原曲が英語の歌詞であれば，旋律やリズムもその歌詞に沿うように作曲されているので，そのよさや美しさを感じ取ってほしいと考えています（日本語の訳詞と両方歌ってみます）
＊重要な単語までの曲の持っていき方，その単語が何かを分析させることで，ふだんの歌唱でも言葉の何が大切なのか考えながら歌う能力を身に付けさせたい
＊他の言語による歌と比較して，英語のもつ語感やリズムの特徴を，音楽だからこそ感じられる形で感じ取らせたい
＊日本語の歌にはない「韻」の響きや，韻律による自然なリズム感と音楽との関係
＊英語の授業では「照れ」があってできないこと（らしく発音する，カッコよく発音する）を音楽の授業でさせたい
・音楽の多様性を考えることができる
・思考力…英語の楽曲のよさやおもしろさを感じ取る
　判断力…英語の楽曲をどのように表現するか考え，工夫する
　表現力…やってみようとする力
・国際的な視野で音楽，とくに歌唱課題に触れる
・学校や集団によっても異なるが，細かな資質・能力については深く考えず，英語の歌を歌った（歌えた）という経験を積ませたいと考えています
・ミュージカル作品の楽曲を扱っているため，ストーリーなどの背景と関わらせて音楽表現することができるようにさせたい

これらのうちの多く（＊を冠した回答）が「英語らしい発音」で歌う指導を充実させることによって，より明確に達成されるものであることに気付く。すなわち，多くの音楽教師が，「英語の歌」を「英語らしい発音」で歌う指導をすることを，その作品のよさや美しさを実感させる上で重要な課題として捉えていると言える。

６　歌唱教材 VS 英語教材としての *Twinkle, Twinkle, Little Star*

これまで見てきたように，高等学校芸術科音楽における歌唱指導では，学習指導要領にも示すように，言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりについて理解したり，創意工夫を生かした歌唱表現に必要な，曲にふさわしい発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能を身に付けたりすることが，育成を目指す資質・能力として考えられている。ただし，前述のようにこれらの「知識及び技能」に関する事項は，「いずれか一つ以上を選択」して取り扱うことができるものとして示されており，「言葉の特性」を理解することや「言葉の発音」の技能を身に付けることが必須ではないことに留意する必要がある。実際，前章に示したアンケート調査の結果から分かるように，多くの音楽教師が「英語らしい発音」で歌うことの指導に不安を抱えており，配当時間数が十分でないことや，英語に対する生徒の苦手意識や抵抗感などの障壁も重なって，「英語の歌」の学習を通して生徒に身に付けさせたいと考える資質・能力が十分に到達できていない現状が見受けられる。

歌唱の学習において，「英語の歌」を教材としながら「言葉の特性」について理解したり「言葉の発音」に関する技能を身に付けたりする際には，学習者（児童生徒）が日本語の歌の歌唱法と「英語の歌」の歌唱法との違いを正しく把握することが重要である。日本の歌ではモーラを単位としながら音符が配列されているのに対し，多くの外国語の歌ではシラブルを単位として音符が配列されている。例えば，小学校音楽科における歌唱共通教材のひとつである「ふじ山」（文部省唱歌）の曲尾「ふじはにっぽんいちのやま」の部分では，「にっぽん」という語に４つの音が充てられている。促音「っ」や撥音「ん」にも独立した音が配当されており，とくに促音「っ」は無声であるため，実際に歌唱する際には「にーいっぽん」と，直前の母音「い」を補う必要がある。

これに対し，英語を含む多くの外国語の歌は，母語を中心とする音のまとまり，すなわち，１音節（１シラブル）１音を原則としており，日本語のように促音や撥音に独立した音符が配当されることはない。ただし，ここで「原則として」としているのは，シラブルのない有声子音に独立した音が配当されることがある。「英語の歌」では-ble や-cle で終わる単語でこのような「シラブル化」とも言うべき音符の配当が行われる。

また，日本語はひとつの子音にひとつの母音が連結しているため，日本語の歌を歌う際には，文字の発音と音符の発音とがほぼ同時に行われるが，外国語の歌ではしばしば子音クラスターが存在し，それらは前打（音符の発音前に発音）して歌われるのであるが，日本語の歌い方でそれらを歌おうとするため，前打されるべき子音に母音を補って発音し，いわゆる「カタカナ歌い」が発生してしまう。

以下では，英語圏で広く親しまれ，小学校外国語科の教科書にもオーセンティックな教材として取り上げられている *Twinkle, Twinkle, Little Star* について分析しながら，教材としての適性について考察する。

この歌の原曲は 18 世紀にフランスで流行したシャンソン *Ah! Vous dirais-je, Maman* で，19 世紀にイギリスの

詩人 Jane Taylor が英語の詩を付けた，いわば「替え歌」で，現在ではイギリスの童謡となっているものである。日本では，母語教育では幼児期に「きらきらぼし」として親しまれている。また，外国語活動等でも曲が短いこと，リズムが平易であること，メロディーが平易であること，音域が狭いこと，反復を用いていることなどから，低・中学年の初学段階で教材としてしばしば用いられている。

谷（2017）は，子どもの英語教育の入門期に *Twinkle, Twinkle, Little Star* のようなナーサリーライムを教材とするのは，①歌や振り付けなどを通して英語を教授できること，②歌が短く，詩がリズミカルであることを利点として挙げている。しかしながら，このような「英語の歌」には，文法的な関係と音の関係が単純に一致しておらず，音の連結（リンキング）などと絡めて処理されることから，文法上の区切りと，音韻上の区切りにギャップがある場合の認識が必要であることも述べている（谷 2017：94）。

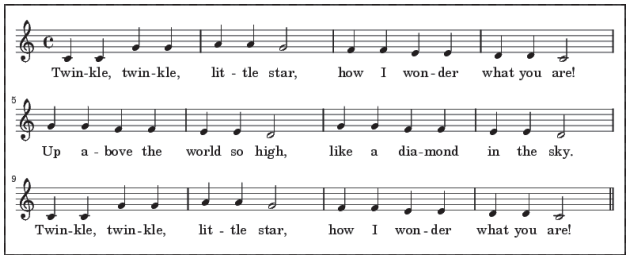
歌詞と音符との関係を詳細に見ると，日本語の「きらきらぼし」の場合は，4 分音符の 1 つに平仮名 1 文字が，2 分音符には語尾が長音化して歌われる。一方，英語の *Twinkle, Twinkle, Little Star* の場合は，4 分音符 1 つに 1 音節が，2 分音符には長母音もしくは二重母音で歌われる（和田 2017：124）。したがって，幼児期に日本語で慣れ親しんだ歌だけに，この歌を「英語らしい発音」で歌うことはとても難しく，また，英語のリズムを感じ取る教材としても，決して適した曲とは言い難いことを指摘することができる。

英語は強弱交替のリズムを持ち，アクセントのある部分が等時間隔である強勢リズムである。また，アクセントをもつ音節はより高く長く明瞭に発音され，他の音節は低く弱く短く曖昧に発音される。一方，日本語は一拍一拍が等間隔で発話される拍リズムであり，アクセントは，拍（モーラ）の高低差で表現されるため，どの母音も弱く曖昧になることはない（谷　2017：109-110，和田 2017：124-125）。したがって，「英語の歌」においても英語の強勢リズムで発話することが大切であり，*Twinkle, Twinkle, Little Star* は，等時間隔の強勢リズムで歌うことで，英語らしく歌うことができる。以下は，この歌詞下に，強勢のある音節を「●」と強勢のない弱音節を「•」で表したものである。

Twinkle,| twinkle,| little| star,
● • ● • ● • ●
How I | wonder| what you | are!
● • ● • ● • ●
Up a | bove the| world so| high,
● • ● • ● • ●
Like a |diamond| in the| sky.
● • ● • ● • ●

“Twinkle, twinkle, little star,” では，“twinkle” の ‘-kle’，“little” の ‘-tle’ の下の部分に弱音節を示す「•」がついている。これは，母音の代わりに，「聞こえ度」の相対的に高い子音である語末の流音［l］［r］や鼻音　［m］［n］が音節を形成する働きを持つといわれる「音節主音子音」だからである（川越　2007:102）。「音節主音子音」とは，普通は音節の中心となるものは母音であるが，例えば，*able*［bl］の音節主音子音である［l］が母音の機能を果たし，一つの音節を構成している。このように英語 little, bottle などの語末の[l]は syllabic consonant と同時に，dark l とも言われ通常［ɬ］と音声表記される（八亀 2013 :187）。

この歌を楽譜に乗せたものとしては，一般的には以下のように表されている。



https://en.wikipedia.org/wiki/Twinkle,_Twinkle,_Little_Star#/media/File:Twinkle_Twinkle_Little_Star.png

谷（2017）によれば，「英語の語彙と音譜との関係を見ると，“twinkle” が ‘twin’ で一音，‘-kle’ で一音が乗せてあり，音節主音子音の ‘-kle’ や ‘-tle’にも音符が与えられている。また，脚韻を踏む語である“star” “are” 等は，すべて強音節だけから構成される単音節語であるが，その他の脚の強音節+弱音節の “Twin-kle”, “lit-tle”, “how I”, “won-der” と同じ扱いにするため，楽譜上では 2 分音符が当てられいる（谷　2017：111）」と分析されている。

外国語活動・外国語科の授業でオーセンティックな教材を用いた「英語の歌」として，この楽譜通りに *Twinkle, Twinkle, Little Star* を歌うように指導するとすれば，これは音楽教育にウェイトが置かれていると考えられる。英語の語彙をこのように 4 分音符と 2 分音符に乗せることで，外国語活動・外国語科の目標で重視されている視点，すなわち，日本語にはない英語独特の音声や強勢リズム等，本来の英語学習としての大切な要素が失われていることになるのではないかと懸念している。

7．外国語活動・外国語科と音楽科の教科横断的な視野からの効果的な「英語の歌」の指導の課題と展望

「英語の歌」の指導では，「英語の歌を歌うことが楽しい」という気持ちを学習者に持たせることが第一であるが，小学校外国語活動や外国語科と音楽科の教科横断的

な視野から指導するためには,「日本の歌」と「英語の歌」のそれぞれの言語文化によって「歌唱法」や「言語の特性」,「発音やリズム」が異なることを学習者に正しく理解させることが必要である。それを踏まえた上で,「英語の歌詞の意味が分かった！」「英語らしく歌えた！」といった達成感を学習者に持たせる指導を行うことが望ましい。

小学校での外国語活動や外国語科の学習において英語の歌を教材とする場合，耳慣れた曲や平易な曲を選択することは確かに重要ではあるが，それらが必ずしも学習者にとって「歌いやすい曲」ではないことを認識しておく必要がある。まして，英語の歌を歌うことによって，英語の発音を習得させたり，英語のリズムを感得させたりしようと試みるのであれば，選択にはいっそう注意が必要である。また，既存の曲をもとに，教師や学習者が歌詞の一部を変えて歌ったり,「替え歌」をつくったりする活動においては，語のアクセントの位置や詩の韻律をメロディーと整合させることや，メロディーのフレージングと詩の意味の切れ目と整合させることが求められる。いたずらに歌詞を変え（変えさせ）たり「替え歌」をつく（つくらせ）ることは，時として学習の妨げとなる危険性も孕んでいることを認識して指導することが重要である。

引用文献

Curtain, H. & Dahlberg, C. A. （2016）. *Languages and Learners : Making the Match: World Language Instruction in K-8 Classrooms and Beyond （5th Edition）*, Pearson.

Eken, D. K. （1996）. Ideas for using songs in the English language classroom. *English Teaching Forum, 34（1）*, 46-47.

川越いつえ（2007）.『英語の音声を科学する』大修館書店.

光村図書（2020）.『Here We Go！ Teacher's Manual 【１】指導書 5/6』

文部科学省（2001）.『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂出版.

文部科学省（2008a）.『英語ノート 1』開隆堂出版.

文部科学省（2008b）.『英語ノート 2』開隆堂出版.

文部科学省（2012a）.『Hi, friends! 1』東京書籍

文部科学省（2012b）.『Hi, friends! 2』東京書籍

文部科学省（2017）.『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』.

文部科学省（2018a）.『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』.

文部科学省（2018b）.『小学校学習指導要領（平成 29 年告示)』

文部科学省（2018c）.『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』

文部科学省（2019）.『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 芸術編』

Phillips, S.（2001）. *Young learners*. Oxford University Press.

Rivers, W. M.（1981）. *Teaching Foreign-language Skills. （2nd ed.）*. Chicago University Press.

高橋美由紀（2006）.「小学校英語活動における 歌やチャンツを活用した指導法」『学校教育学研究』第 18 巻, 45-55.

谷明信（2017）.「マザーグーズの英語を音韻的にみる」有働眞理子・谷明信（編著）『英語音声教育実践と音声学・音韻論－効果的で豊かな発音の学びを目指して』, ジアース教育新社, 94-113.

東京書籍（2020）.『NEW HORIZON Elementary English Course 5/6 教師用指導書 研究編』.

和田あずさ（2017）.「小学校段階における英語音声指導－「歌とチャンツ」に焦点を当ててー」有働眞理子・谷明信（編著）『英語音声教育実践と音声学・音韻論－効果的で豊かな発音の学びを目指して』, ジアース教育新社, 114-135.

八亀五三男（2013）.「流音 l について」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』24(2)，187-198.

山内優佳（2017）.「小学校における外国語授業で活用できる楽曲の選定と指導法の提案 －外国語リスニング研究の知見からー」『広島文化学園大学学芸学部紀要』（7） 67 -74.

【連絡先 高橋美由紀 E-mail：miyukit@auecc.aichi-edu.ac.jp】

Teaching “English songs” in Foreign Language Activities/Foreign Language Education and Music Education
-Focusing on cross-curricular instruction and “phonological structure”-

Miyuki Takahashi[1], Nobukazu Kawai[2], Ikuko Sawada[2] and Yoshikazu Yanagi[3]
[1]Faculty of Education, Aichi University of Education
[2]Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education, Aichi University of Education of Education & Shizuoka University
[3] Faculty of Foreign Studies, Nagoya Gakuin University

ABSTRACT

“English Songs” have long been used as teaching materials for both Foreign Language Activities/ Foreign Language Education and Music Education. In *The New Course of Study* introduced in 2020, “English songs” are included in the educational content for both subjects. However, they are not treated in a unified way.

This paper is intended to investigate the effective teaching of “English songs” from a cross-curricular perspective of foreign language education and music education. To begin with, we analyze the position and educational purpose of “English songs” based on *The New Course of Study* and on research in specialized fields of both subjects separately. Next, as teaching materials for practical instruction, in order to connect to cross-curricular instruction from both subjects, specifically in the textbooks of elementary school’s foreign language education. We take up the English song *Twinkle, Twinkle, Little Star*, and discuss it from the standpoint of “phonological structure”.

Keywords

English Education, Music Education, English songs, phonological structure